

## 対照研究を通してみる日中両言語の違い

楊凱榮

東京大学大学院 総合文化研究科教授 兼人民大學講座教授

### 1. はじめに

言語が異なれば表現も異なる。特に外国語に触れた時、母国語との間に見られる相違に戸惑うものである。我々は外国語あるいは母国語の問題に直面した時、一つの言語の内部だけでは気付かない現象が、他の言語との比較を通じて見えてくる場合がある。その意味で対照研究は我々にさまざまな研究視座と問題解決のヒントを提供してくれると言える。本研究ではこのような事例をいくつか取り上げ、対照研究を通じて中国語と日本語の違いを指摘したうえで、両者の違いの動因も明らかにしていく。

### 2. 副詞について

#### 2.1 「絶対」と“絶対”の違い

- (1) a 这个孩子绝对聪明。  
b この子は絶対に頭がいい。
- (2) a 这儿的菜绝对好吃。  
b ここの料理は絶対おいしい。
- (3) a 他明天绝对来。  
b 彼は明日絶対来る。
- (4) a?我上车后绝对睡觉。  
b 列車に乗ったら、絶対寝る。
- (5) a??明天我绝对去。  
b 明日絶対行く。
- (6) a\*你明天绝对来!  
b 明日絶対来いよ。

例(1)-(3)においては中国語と日本語が対応し、いずれも事態に対する話し手の判断を表しているが、(4)-(6)では相手に対する命令や話し手の意志表現であり、両者が対応していない。以上の対応関係を見れば、以下のことが言えるのではないか。つまり、中国語の“绝对”はいずれも事態に対する話し手の判断にしか用いられないのに対し、日本語の「絶対」はそれにとどまらず、命令、意志表明にも用いられるということである。

一方、副詞のモダリティ性から見れば、中国語の“绝对”は認識モダリティ専用の副詞という性格が強いのにに対し、日本語の「絶対」は命令・意志表現（事態制御文）とも共起できることから、少なくとも認識モダリティ専用の副詞ではないということが言える。両者の違いは、以下のように示すことが可能である。

日本語の「絶対」 → 認識、事態制御文と共起可能

中国語の“绝对” → 認識、事態制御文と共起不可

以上、日本語の「絶対」と中国語の“绝对”の違いを大まかに示しているが、詳しくは張麗群・楊凱榮（1995）を参照されたい。

## 2.2 「たまに」と“偶尔”の違い

「たまに」と“偶尔”は頻度副詞として頻度が低いことを表すものである。しかし、頻度多寡の角度からとらえるだけでは不十分であろう。とりわけ中国語の“偶尔”は客観的に頻度が低いことを表すのにとどまらず、小数量ではあるが、ゼロに対する否定を主張する時に用いられやすい。例えば、

(7) 评分标准: 1.从来没有 2.很少 3.偶尔 4.大多是 5.经常是 (CCL)

この例文はアンケート調査の回答項目を表したものである。頻度から見れば、“很少”と“偶尔”がどちらの頻度が高いのかを客観的に判断するのは難しい。人によって判断が分かれる可能性がある。しかし、この例文において、“偶尔”は“很少”より頻度が高い順として位置づけられている。換言すれば、“偶尔”によって表される頻度の少なさは客観的なものではなく、あくまでも話し手の認識によるものである。以下の例文を見られたい。

(8) a 你常常开夜车吗?

b 不, 我很少开夜车。

c?不，我偶尔开夜车。

(9) a 你从来不开夜车吗？

b?不，我很少开夜车。

c 不，我偶尔开夜车。

(8)の a では「よく徹夜するのか」ということを尋ねる時に、返事として、同じ少ないことを表すのに、b のように“很少”を用いるのは自然であるが、c のように“偶尔”を用いると不自然になる。一方、「全然徹夜しないのか」ということを尋ねる時に、返事として頻度が低いものの、ゼロではないということを表すのに、b のように“很少”を用いるのは不自然であり、c のように“偶尔”を用いると自然となる。要するに、“偶尔”は頻度が高いことを否定するのには使用されないが、頻度がゼロであることを否定するのに用いやすいということである。

沈家煊（1999）では、英語と中国語には同じ少ないことを表しているものの、言外に多いことを主張したり、少ないことを主張したりする表現があり、それぞれ次のような例が挙げられている。

(10)a He has a few friends in high places.

b He has few friends in high places.

沈家煊（1999）では、a と b は同じ数が少ないことを表すが、a はゼロ数から見ての少数であり、肯定の意味があるのに対し、b は大数量に対する否定の意味における少数であり、否定的なニュアンスがあると指摘し、また“一会儿”と“不一会儿”の違いについても、両者は同じ「しばらく」という意味を表すが、“一会儿”はゼロから見ての小数量と、大数量に対する否定の小数量の意味を表すが、“不一会儿”は期待の大数量に対しての小数量を主張するときにはしか用いられないという。

これに関連して、表現こそ異なるものの、日本語にも似たような現象が見られる。例えば、「～しかない」と「だけ」は以下のような違いが見られる。

(11) a 私には千円しかない。

b 百円だけあれば、アイスクリームが買えるじゃないか。

(11)a の「しかない」は単に少ないことを表しているのに対し、b の「だけ」は少ないことを表現するのではなく、むしろ、ゼロから見て多いこと

を主張するのである。

こうしてみると、頻度の低いことを表す“偶尔”は話し手の認識において、ゼロであることを否定し、むしろ少なくないということを主張するときにも用いられるということが分かる。ただし、日本語の「たまに」にも同じ用法があるかどうかもう少し調査と分析が必要であろう。

一方、「たまに」と“偶尔”をモダリティ性から見ると次のような違いが見られる。

中国語の“偶尔” → 話し手の認識や評価が可能、事態制御文不可

日本語の「たまに」 → 話し手の認識や評価、事態制御文のどちらも可能

次の例文では日本語は成立するが、中国語は成立しない。

(12) a たまには研究しろ！(google)

?b 你偶尔研究一下！

(13) a ところで元気か、ケンイチ。たまには母さんに電話でもして（朝日コム）

\*b 偶尔给你母亲打个电话吧。

(14) a たまには息抜きしてください。

\*b 偶尔休息一下！

(15) a たまにはウナギでも食おう。

\*b 我们偶尔吃一次鰻魚吧。

実際に一見同じような意味を持つ副詞は最も誤用が生じやすいものである。異なる言語の比較対照を通じて、その違いが明らかになれば、誤用も回避できるのだろう。

### 3. 所有表現と受益表現

所有表現と受益表現は全く異なる文法概念であり、一般にあまり混同されることはないだろう。しかし、実際に日本語では所有の形を用いることができるが、中国語では受益表現を用いなければならない事例が見られる。

(16) ?a 今天我要做孩子的盒饭，所以早点回去。

b 今日子供の弁当を作らないといけないので、早く帰る。

(17) ?a 男的跟女朋友一起出去时应该买她的车票。

b 男はガールフレンドと一緒に出かけるときは彼女の切符を買うべきである。

(16a)と(17a)は日本人の手になる中国語の誤用例で、日本語では「子供の弁当」のように、助詞「の」を用いても成立するが、中国語ではそれに対応する“的”を用いると明らかに不自然である。この文脈では、中国語は下記のように、“给”による受益構文を用いるのが普通である。

(18) 今天我要给孩子做盒饭，所以要早点回去。

(19) 男的跟女朋友一起出去时应该给她的女朋友买车票。

一方、次の(20a)は中国人の学習者の誤用例である。

(20) \*a お母さんが子供に手を洗ってあげた。

b お母さんが子供の手を洗ってあげた。

(20a)は受益表現の“妈妈给孩子洗手”という中国語の干渉によって生じたものと思われる。正しい日本語の表現は(20b)である。しかし、(20b)を中国語に訳すと、(21)のような不自然な中国語になる。

(21)\* 妈妈洗孩子的手。

このような違いをどのように説明すればよいのだろうか。

### 3.1 中国語の所有表現と受益表現

中国語の“N1+的+N2”は所有関係を表すだけでなく、そもそも N1 が N2 を分類するための参照値としても機能する。

(22) 孩子的盒饭已经做好了。

子供の弁当はもうできた。

(22)は“孩子的盒饭”を主題化したものである。主題化によって対比の意味が前景化し、“孩子”は他のメンバーと区別するために機能するため、自然な文となる。このような区別のための機能が前景化すると、以下の表現も成立可能である。

(23) 孩子的盒饭我来做。

子供の弁当は私が作る。

(23)は N1 (“孩子” (子供)) がほかのメンバーと区別する役割を果たしている。同様に、(17a)における“买她的车票” (彼女の切符を買う) も、主題化することによって、対比関係を前景化すれば、“的”によって導かれる N1

（“她”（彼女））は他のメンバーとの対比の意味が生じ、成立可能となる。  
例えば：

(24) 她的车票我来买。

彼女の切符は私が買う。

実際に N1 に対するものの授受や利益の授受の事態を成立させるには  
“给”を用いる必要がある。

(25) 今天我要给孩子做盒饭。

今日子供に弁当を作ってやらなければならない。

“给”→「与える」→受給のマーカ→受益のマーカ

形式：“给+N1+V+N2”

(25)は N1 “孩子”が受給の受け手だけでなく、受益の受け手としても機能する。しかし、(26)では、N1 “孩子”は受給の相手ではなく、受益の相手としてのみ機能する。

(26) 妈妈给孩子洗手。

お母さんが子供の手を洗ってあげる。

(26)は利益の供与のみで、実物の供与がない受益構文である。中国語では受益者としてしか機能しない N1 に対しても“给”を用いるべきであり、所有者格の“的”を用いてはならない。次の例文は“的”を用いたため、適格さを欠く表現となる。

(27) ??妈妈洗孩子的手。

お母さんは子供の手を洗う。

以下の文の成立の可否は受益構文と所有構文の違いを反映している。

(28) a 妈妈给孩子洗手。

b ??妈妈洗孩子的手。

お母さんが子供の手を洗ってあげる。

(29) a\*妈妈给孩子打手。

b 妈妈打孩子的手。

お母さんが子供の手をぶつ。

(28a)は子供が受益者としてサービスを受ける対象であり、(28b)は“的”が  
用いられることによって、目的語の位置にある子供が処置される対象として被害を受けるニュアンスをもつ。そうした意味と構文の間に矛盾が生じ

ているため、(28b)は不自然な文となる。しかし、(29)のように、述語の部分を“洗手”（手を洗う）から“打手”（手をぶつ）に置き換えると、子供が意味的に受益者として機能しなくなるため、今度は“孩子の手”を直接目的語としてとることが可能となり、(29b)が自然な表現となる。それに対して、(29a)は受益構文を用いながら、「手をぶつ」という被害の意味を表しているため、不自然な表現となる。

### 3.2 日本語の受益表現と所有表現

では日本語の受益表現と所有表現の使い分けはどのようなになっているのか。

(30) a??お母さんが子供に手を洗ってあげる。

b お母さんが子供の手を洗ってあげる。

(30a)は「子供の」ではなく、「子供に」を用いているのは明らかに中国語の“给”構文の干渉によるものである。中国語では受益者を“给”によって導入しなければならないが、日本語では受益者に対してつねに「に」が用いられるわけではない。実際に受益者に対する「に」の使用に制限があるため、受益者として機能するだけでは不十分であり、物や情報などの受給が必要である。それに対し、“给”の影響により、物や情報の受給がなくても、「に」を用いたため、(30a)のような誤用が生じたものと考えられる。

日本語の「受益表現」において実際に与格だけでなく、所有格も受益者として機能する。

(31) a 已是秋天了，阵阵秋风送来了寒意。托儿所通知家长们给孩子送棉衣了。《中日对译语料库》

b すっかり秋だ。吹くそよ風も肌寒い。託児所からは子どもに棉入れを持参するように通知がきている。《中日对译语料库》

c もう秋であった。そよ吹く秋風が肌寒い。託児所から子供の綿入れの服を届けるようにとの通知が来ていた。《中日对译语料库》

上の例文では日本語の訳はそれぞれ「に」と「の」の両方が用いられているが、次の例文

では「の」しか用いられていない。

(32) a 常常在深夜里，老头子林伯唐到别的姨太太房里去了，秀妮悄悄爬起

身，给孩子换尿布、喂奶，亲着美丽的小圆脸蛋，《中日对译语料库》

b 夜ふけになって、老人の林伯唐がほかの妾の部屋へ行ってしまったあと、秀妮はこっそり起きあがって、赤ん坊のおしめをかえたり、乳を飲ませたり、その愛らしい小さな丸顔に頬ずりしたりした。《中日对译语料库》

さらに目的格も受益者として成立可能である。次の(33a)では受益者が目的格として機能している。しかし、中国語では目的格について、“给”を用いることができない。

(33) a 先生が（私を）褒めてくれた。

b\*老师给我表扬了。

(34) a?先生が私を褒めた。

b 老师表扬我了。

両者の違いは次のようにまとめられる。

日本語の受益表現は語用論的なもの

[ [N1 が N2 (に／の) N3 を V] (てくれる／てあげる) 受益表現]

中国語の受益表現は文法的な関係を示す

[N1+给 (受給／受益) +N2+N3]

(35)a 「子供の弁当を作らなければならないので、早く帰る」

b 「子供に弁当を作ってあげなければならないので、早く帰る」

上の二つの例文はいずれも文法的に問題がないが、日本語では事実関係を示すだけで、恩着せがましいニュアンスを殊更に強調する必要がない場合は a が選ばれるが、ざわざわ b のように、「～てあげる、てくれる」を用いる必要はない。

一方、中国語の受益表現は文法関係を示すため、日本語のような待遇表現としての恩着せがましいニュアンスがない。

#### 4. 視点の違い

このような受益表現をめぐる日中両言語における違いは視点の角度からも説明できる。



視点とは、どのようなカメラ目線で事態を言語化するか、ということである。日本語には視点の一貫性や発話当事者の視点ハイアラーキがあり、話し手は常に自分の視点を取らなければならない、他人寄りの視点を取ることができないという（久野暉 1978）。

(34a)では日本語表現としては「てくれる」を用いたほうが自然であるが、中国語には視点の制約がないため、「～てくれる」の不使用を選択してしまう。次の受身表現は視点違反によるものである。

(36) ?a 彼女が私に振られた。

b 私は彼女に振られた。

日本語には、主語の順番が 1 人称 > 2、3 人称のように、発話当事者の視点ハイアラーキが存在する（久野暉 1978、角田 1991）。

(36') a 她被我甩了。

b 我被她甩了。

(36')において中国語では a と b のように、1 人称と 3 人称のいずれをも主語にすることができる。また日本語では使役表現においても 1 人称ではなく、3 人称を主語にすると、視点制約に違反することがある。

(37) a? 上司が私に無理やりに酒を飲ませた。

b (私は) 上司に無理やりに酒を飲まされた。

(37)では a よりも、b のほうがより自然である。一方、中国語はそのような制約がないため、3 人称を主語にしても差し支えない。例えば、

(38) 上司硬让我喝酒。

視点の制約は次の能動文と受動文を同時に持つ複文においても同様に見られる。日本語では、視点の一貫性を図り、視点を発話当事者において言語化する。中国語では別々に主語を立て、二つの能動文で対応する。(39)において、日本語では視点の統一が行われているが、中国語ではそうではない。これを(40)のように置き換えても差し支えない。

(39) a 突然そう訊かれた私は、さても柏木らしからぬ質問だと思った。(中日対訳コーパス)      b 这突然的一问，根本不象从前的柏木的脾气。

(40) 柏木突然这么问我，我觉得根本不象从前的柏木的脾气。

一つの（複文も含めた）文に話者を含めた複数の主語が存在する場合、主語を一つに統一し、話し手寄りの視点をとる日本語に対し、二つ以上の主語が現れても差し支えなく、視点の制約をうけないのが中国語である。

このような視点の一貫性や発話当事者による制限の現象は日本語の多くの慣用表現にも現れている。

(41) 食うか食われるか。

你死我活。（你吃我，我吃你）

(42) 抜きつ抜かれつ。

你追我赶。

(43) 持ちつ持たれつ。

你帮我，我帮你。（互相帮助）

日本語では能動文と受身文の形を同時に用いて主語を一つ（主語が表れていないが、話者自身に置かれている）にし、視点の統一が図られるのに対し、中国語では二つの主語が用いられ、視点の統一がされていない。日本語では視点の一貫性が重視されるため、たとえ発話当事者が文に現れなくても、視点の一致を図ろうとする傾向が強い。

(44) a 食べたい人は手を挙げてください。

b 進想吃進举手。

c 想吃的人举手。

こうした現象からも、日本語と中国語の視点の一貫性に関する主語の選択の動機づけの一端がうかがえる。次の『北風と太陽』に見られる主語の現われ方に関しても同じことが言える。

(45) a 旅人の服を剥がした方を勝者にする事が決まった。（『北風と太陽』）

b 進能使行人脱下衣服，进就胜利。（『北风与太阳』）

日本語では複数の述語であっても主語を一つだけに絞り、同一の視点から事態を述べる表現方法を選ぶのに対し、中国語ではそれぞれの文に対し、主語がたてられ、異なる視点から事態を述べる表現方法を選ぶことが優先される。

このように、視点の一貫性や視点を発話当事者におくことが要求される日本語に対し、中国語ではそうした制約がなく、二つの述語に対し、それぞれに主語がたてられ、発話当事者に視点をおかなくてもよいということ

が分かる。

## 5. 感情・感覚表現と人称制限

感情・感覚表現の表出において、日本語と中国語の間に人称制限があるかどうかで違いがあることがよく言われている。

- (46) a (私は) うれしい。 我很高兴。  
b?彼はうれしい。 他很高兴。  
(47) a 彼はうれしそうだ。 他好像很高兴。  
b 彼はうれしがっている。 他很高兴。  
(48) a (私は) 足が痛い。 我脚痛。  
b?息子は足が痛い。 儿子脚痛。  
(49) 息子は足が痛がっている。 儿子脚痛。

日本語では他人の感情や感覚について述べる場合、人称制限を受ける。他人の感情・感覚は他人のものであることを示す標識が必要である。それについては従来以下のような説明がある。

1. 縄張り説 (神尾 1990)
2. 日本語の主観性 (池上 1999)
3. 認知言語学からの説明 (王安 2005)
4. 証拠性による説明 (Aoki, H. 1986、李佳樑 2013)

現実の世界では他人の感情・感覚を直接に体験できないのはどの言語においても同じである。しかし、それをどのように言語化するのは別問題であり、言語によって異なった表現を用いてもよいはずである。人の感情なり感覚は表情などに現れ、目で見てとれるはずである。中国語では自らの目で観察し、確認したことを他人に伝える時に何らかの標識を付与しなくてもよい。一方、日本語では他人の感情や感覚は話者自身では体験できないので、それを伝える時には何らかの標識を付与する必要がある。したがって、中国語では他人の感情・感覚は自分の感情・感覚と同じ形式でもって言語化できるが、日本語ではそれができないということになる。

## 6. 動作と状態変化

一方、動作と状態変化に関しては日本語と中国語は逆転してしまう現

象が見られる。

「なる」と“当”、“成”について、日本語では「なる」は動作と状態変化のいずれも表せるが、それに対応する中国語では“当”は動作、“成”は状態変化にしか用いられない。

(50) 将来サッカー選手／学者／医者になる。

(51) 将来想当／\*成足球运动员／学者／医生。

(52) 彼は犯人になった。他?当／成了犯人。

次の例文においても日本語では動作と状態変化はいずれも同じ言語形式を用いることが可能であるが、中国語では動作は無標、状態変化は有標である。

(53) 服を着ないと風邪を引く（よ）。

(54) 不穿衣服会感冒的。

(55) \*不穿衣服感冒。

(56) a 彼は風邪を引いた。

b 他感冒了。

(57) a 氷点下になると氷がとける。

b 一到零度以下冰就会化掉。

c\*一到零度以下冰化。

(58) a あの川の氷がとけた。

b 那条河里的冰化了。

(59) 動作行為（非能格動詞文） S+V+O S+V

(60) 状態変化（非対格動詞文） S+会+V [未然] S+V+了 [已然]

\*S+V [未然]

動作と状態変化は異なる文法カテゴリーに属し、文法の振る舞いも違うはずである。状態変化は、変化後はその事態が確認可能であるが、変化の前は確認できないので、見込みの形で表現される。したがって、中国語では状態変化を表す場合、述語はある種の制限（動作と異なる構文制限）を受け、見込みであるということを示す必要がある。一方、日本語では状態変化であっても、何らかの標識を付与しなくても可能である。なぜ、日本語と中国語との間にこのような違いが見られるのか。

このことは証拠性（evidentiality）の様々な情報をどのような方法で言語

化するのかということと大きく関わっている。中国語では他人の感情や感覚であっても、それが外部に現れている様子であり、話者が外部観察などを通して、確認できる。そうしたことを話者自らの直接の体験として語り、無標の形を用いることができ、間接的な証拠の形で示さなくてもよい。ところが、状態変化については未実現の場合は確認できず、実現後の形でしか確認できない（木村英樹(1997)）。したがって、中国語では発話の時点において、状態変化が実現した場合は“了”という已然の標識を用いるだけでよい。しかし、未実現の変化について、変化したことを確認できないので、間接的な証拠である“会”といった見込みの標識を付与することが必要である。

一方、日本語ではなぜ状態変化について、間接的な証拠である、見込みを表す標識を義務付ける必要がないのだろうか。もちろん日本語でそうした証拠性を提示し、「だろう～」のような推測を表す標識を付与しても可能である。しかし、日本語の現在終止形（辞書形）を用いても話者のある種の認識を示すことが可能なのである。言い換えれば、日本語では動詞の文末形式自体が確言ムード（寺村秀夫（1984））をもっているということである。「～だろう」と無標形式によるモダリティの違いについて、宮崎和人（2002）では無標の文末形式は「確信的な判断」を表すとしている。つまり、日本語では無標形式をもって、話者の「確信的な判断」という証拠を示していると言える。

中国語ではさらに、移動表現においても、動作であるかそれともか状態変化であるかにより、構文的な差が見られることがある。

(61)a 跑哪儿去了？

?b 去哪儿了？

この例文は奔腾剃须刀のコマーシャルで、ひげを剃った後、シェーバーがひげと共に消えたかという文脈で用いられている。この二つの表現を見れば、両者の違いが分かり、動作の表現は次の(62a)の形式が用いられ、状態変化の表現は(62b)の形式が用いられるということになる。

(62)a (S)+V+場所+了

b (S)+(前置詞)+場所+V+了

次の例についても、両者の構文の振る舞いの違いが見られる。

(63) a 私の財布はどこへ行った？

?b 我的钱包去哪儿了？

c 我的钱包（到）那儿去了？

一方、日本語では移動表現における動作と状態変化の違いは述語ではなく、格助詞において見られることがある。

(64) 彼が部屋 を／から 出た。

(65) 他从房间出来了。他走出了房间。

(66) 猿が籠 ?を／から 出た。

(67) 鳥が籠 ?を／から 出た

(68) 涙が眼 \*を／から 出た。

これらの表現を見ると、日本語では同じ移動表現であるにもかかわらず、動作の場合は「を」と「から」のどちらの格助詞を用いてもよいが、状態変化の場合は「を」を用いると不自然な表現になることが分かる。この原因は当然格助詞の「を」と「から」の違いに求められるが、これについてはここでは深入りする余裕がないので、当面の関心事である日本語と中国語の動作と状態変化の違いにだけ限って言えば、次のようにまとめられる。

動作と状態変化を表す一部の事態に関して日中両言語において異なる方法で言語化されることがあり、中国語では状態変化に関しては述語の有標化が要求されるが、それに対して、日本語ではそうした有標化を必要としない。ただし、一部の移動表現では格助詞によって両者が区別されることがある。そのような違いは証拠性を示す手段の違いと文末形式のモダリティ性の違いに起因するものであると考えられる。

## 7. 終わりに

以上、いくつかの事例を取り上げ、日中両言語における違いを対照研究の形で見てきた。対照研究を通じて、両者の違いやその違いをもたらした原因なども含めて考察し、分析した。様々な現象に関する考察を通し、両者の違いはモダリティや語用論的ものだけでなく、また視点や証拠性などさまざまなレベルにわたって見られた。こうした比較対照を通じて、日中両言語において、一見同じような語彙や構文であっても、それぞれの表現

が異なる機能を有すると同時に、同じ事態であっても、異なる視点や認知の仕方によって、言語化されていることが分かる。本稿で言及されている違いやそれに関する説明は講演という制限もあり、必ずしも網羅的で、厳密な論証が展開されているわけではない。日本語の「絶対」と中国語の“绝对”、また受益表現や視点に関する対照研究などは本稿に掲載されている参考文献を見られたい。なお、日本語と中国語における動作と状態変化の表現に関するさらなる分析や考察は今後の課題としたい。

**注記：**本稿は2014年5月3日東呉大学で開催された日本語教育学シンポジウムで講演した予稿集に手を加えたものであり、一部の体裁は講演のままの形になっている。

また、本文の例文の一部到北京日本学研究センター中日対訳コーパスを使用している。

## 参考文献

### 〔日本語文献〕

- 池上嘉彦 1999. 「日本語らしさの中の〈主観性〉」『言語』1月号 大修館書店
- 王安 2005. 「現代日本語の感情形容詞における主観性の認知的考察」, 『日本認知言語学会論文集』第5巻
- 神尾昭雄 1990. 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 久野暲 1978. 『談話の文法』大修館書店
- 張麗群・楊凱榮 1995. 「日本語の「絶対」と中国語の“绝对”」, 『教養研究』第1巻第3号, 九州国際大学
- 角田太作 1991. 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 寺村秀夫 1991. 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中右実 1980. 『文副詞の比較』, 国廣哲弥編『日英語比較講座2 文法』。大修館書店
- 仁田義雄 1989. 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」, 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版

- 水谷信子 2001. 『続日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 森本順子 1994. 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- Heiko Narrog 2002 「意味論的カテゴリーとしてのモダリティ」, 大堀壽夫  
編『認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』東京大学出版会
- 宮崎和人 2002. 「認識のモダリティ」, 宮崎和人、安達太郎、野田春美、  
高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 楊凱榮 1989. 『日本語と中国語の使役表現に関する対照研究』くろしお出版
- 楊凱榮 1994. 「受益表現について—“給”と“てあげる、てくれる”との比較を中心に—」, 『教養研究』第1巻第1号, 九州国際大学
- 楊凱榮 2009. 「中日受益表現と所有構造の対照研究」, 『日中言語研究と日本語教育』好文出版
- 楊凱榮 2011. 「日中連体修飾節の相違に関する考察」, 《汉日语言对比研究论丛》北京大学出版社
- 楊凱榮 2013. 「誤用例にみる日中表現の違い」, 『日本語学』11月号, 明治書院
- 李佳樑 2013. 『現代中国語における証拠性——情報源表出形式の意味機能——』東京大学総合文化研究科提出博士論文
- [中国語文献]
- 古川裕 1989. 「副詞修飾是字情况考察」, 『中国语文』第1期
- 木村英樹 1997. 「变化与动作」, 余霽芹、遠藤光暁編『橋本萬太郎紀念中国語学論集』。内山書店
- 木村英樹 2013. 「日汉对照: “视点”与表达」, 《第五届汉日对比语言学研究會資料集》。
- 沈家煊 1999 《不对称和标记论》江西教育出版社
- 张谊生 2000. 《现代汉语副词研究》学林出版社
- 张伯江 1994. 「领属结构的语义构成」, 《语言教学与研究》第2期
- 张伯江 2001. 「汉语里指人目标语的价变—汉语语态的连续观—」, 筑波「東  
西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告Ⅳ
- 张敏 1998. 《认知语言学与汉语名词短语》, 中国社会科学出版社
- 吕叔湘主编 1999. 《现代汉语八百词 增订本》, 商务印书馆